

Ⅲ. 研究方法

1. 研究期間：平成23年7月～平成23年11月
2. 研究対象者：病棟看護師27名
3. 研究方法（研究および活動内容）
 - 1）介護老人施設への見学と遊びの検討
 - 2）遊びの企画（①カレンダー作り②習字③塗り絵④折り紙⑤福笑い⑥手作りパズル）と物品の準備
 - 3）遊びの実施
 - 4）アンケート調査
4. 倫理的配慮

アンケート用紙は無記名とし、個人が特定できないように配慮する。また、得られたデータは本研究以外では使用しない旨を説明し、回収により同意を得られたものとする。

Ⅳ. 結果

病棟で遊びを取り入れるにあたり介護老人施設でどのような遊びが行われているのかを見学へ行き、検討を行った。急性期病棟でも行える遊びとして上記①～⑥までを企画、物品を準備し、病棟看護師に対して遊びの種類や使用方法を説明し、活用を開始した。その後病棟看護師に遊びが活用されているかアンケートを実施した結果、「患者に遊びを実施してもらったことがあるか」という質問に対しては全員が「はい」と答えた。遊びを実施しての感想では「句を詠んだりなど患者の新たな一面がみえて嬉しかった」「日々の業務の中でもっと余裕があれば患者と関わりたいと思っていた」「カレンダー作りで季節を思い出す患者も

いた」「集中して塗り絵をしている姿がみられ、勧めて良かった」などがあった。また、患者の家族からも「いつも寝てばかりだったのに、こんなに文字が書けるんですね。私の名前も思い出して書いてくれました」と喜ばれたという記載もあった。

Ⅴ. 考察

急性期病棟での遊びの取り組みは活用されにくい現状であり、高齢患者が単調な生活を送ることに看護師はジレンマを感じていた。しかし急性期病棟でも実施できる遊びを企画し、物品の準備や方法を提示したことで短時間でも容易に遊びを行うことができ、看護師全員が遊びを提供するという結果になった。遊びを通して患者と関わっていくことで患者の時間の過ごし方に変化があり、今までただ車椅子に座っていた時間を、遊びながら楽しく過ごし患者の気分転換となったことを実感できた。また、落ち着きのない患者にも、遊びを勧めることで、その時間を遊びに集中して過ごすことができ、良い効果があったといえる。患者の家族からも患者の作品を見て喜ぶ姿もみられ、家族にとっても患者の普段とは違う一面がみられるきっかけとなっている。このように患者や家族からの反応が返ってくことで看護師にも「遊びを行って良かった」という意見が聞かれ、高齢患者に対して遊びを取り入れることで患者との交流を深め、遊びが患者にとって楽しみながら時間を過ごせるものだというを実感できた。今後は看護師の遊びに対する意識の継続が図れるようにしていくことが課題である。

子育て支援「ママサロン」の実施回数についての検討 ～ 3回コースと6回コースを比較して ～

6-1病棟 大和田 裕美 稲川 由美
市川 恵美子 佐野 由美子
川崎 陽子 渡邊 幸子

Ⅰ. はじめに

当院では平成18年3月より当院で出産した生後1～3ヶ月の子どもを持つ母親の子育て支援を目

的に「ママサロン」を実施している。ママサロンはカナダ保健省により開発された親支援プログラムNobody's Perfect（以下NPとする）をベースとし、グループワークにより子育てについて互い

に考える機会や仲間作りの場を提供している。NPでは週1回、全6回以上のプログラムを行うよう規定されているが、当院では参加希望者が多いなどの理由から、全3回のプログラムを実施している。

ママサロンでは過去4回、NPの規定に則った6回コースを実施しているが、3回コースと比べて参加者同士の結びつきが強いような印象を受けた。そこで、ママサロンの実施回数について検討するため、3回コースと6回コースの参加者にアンケート調査を行った。

II. 研究方法

研究対象は、ママサロン3回コース参加者(59名)および6回コース参加者(29名)とし、無記名のアンケートを3回コースではママサロン終了時に配布、6回コースでは郵送した。

III. 結果および考察

両コースともに参加者のほとんどが「参加してよかった」「仲良くなれた」「相談相手ができた」と答えており、ママサロンの満足度は高く、子育ての仲間作りの場として効果的であるといえる。

さらに、両コースとも語り合いの回から仲良くなれたという参加者が多く、語り合いの回が多い6回コースの方がより親密さが増したのだと考えられる。

参加後に地域の子育て支援センターなどを活用しようと思った参加者の割合は3回コースの方が高かったが、その理由から、ママサロンでの仲間作りや語り合いに物足りなさを感じていると考えられる。

参加後の子育てに関する考えの変化について、「変わった」と答えた参加者が6回コースの方が多く、その内容から、「みんな一緒」に悩みながら子育てをしているという安心感や「これでいい」と自分の子育てに対し自信をもてるようになったことが明らかになった。このことから、NPの理念は6回コースの方がより浸透したと考えられる。

IV. 結 論

1. NPのプログラムを最大限活かすためには、6回コースの開催が望ましい。
2. 会場の確保やスタッフの人数などを考慮し、今後ママサロンの実施回数を増やしていけるよう、さらに検討していきたい。

高齢者の下痢に伴う臀部のスキントラブルに対する撥水剤の有効性の検討

5-2病棟 池上 絢美

回対象患者に実施後、スキントラブルが起こりにくいことが示唆されたため結果を報告する。

I. はじめに

高齢者の皮膚は保湿・弾力性が低下している。オムツを使用するとオムツ内の皮膚が高温多湿の環境に置かれ皮膚のバリア機能が障害されやすい状態にある。日常の臨床の間ではこのような要介護高齢者に泥状あるいは液状に近い便(以下下痢)が始まったことに起因して臀部に発赤や皮膚剥離(以下スキントラブル)を起してしまっている場面を度々見ることがあった。そこで下痢を起こしたオムツ装着者の高齢者に、市販されているワセリンを含有した撥水性の高いゼリー状のクリーム(以下セキュラPO)を塗布し、臀部のスキントラブルが予防可能か明らかにしたいと考えた。今

II. 目 的

高齢者のオムツ装着患者が下痢の際、セキュラPOにより臀部のスキントラブルを予防できるかを検証する。

III. 方 法

1. 対象者:オムツを使用している要介護4から5以上の高齢者で入院中下痢が始まった患者
2. 対象人数:7名